

専修念仏のともがらの、わが弟子ひとの弟子、という相論のそうろうらんこと、もつてのほかの子細なり。親鸞は弟子一人ももたずそうろう。そのゆえは、わがはからいにて、ひとに念仏をもうさせそうらわばこそ、弟子にてもそうらわめ。ひとえに弥陀の御もよおしにあずかって、念仏もうしそうろうひとを、わが弟子ともうすこと、きわめたる荒涼のことなり。つくべき縁あればともない、はなるべき縁あれば、はなるることのあるをも、師をそむきて、ひとにつれて念仏すれば、往生すべからざるものなりなんどいうこと、不可説なり。如来よりたまわりたる信心を、わがものがおに、とりかえさんともうすにや。かえすがえすもあるべからざることなり。自然のことわりにあいかなわば、仏恩をもしり、また師の恩をもしるべきなりと云々

第4組 瑞雲寺住職

第6章 弟子の道

小泉 元瑞

text by Genzui Koizumi

専修念仏

宗祖が尊敬された法兄聖覚法印は、「専修というは、極楽をねがうところをおこし、本願をたのむ信をおこすより、ただ念仏の一行をつとめて、まったく余行をまじえざるなり。他の経・呪をも、たもたず、余の仏・菩薩をも念ぜず、ただ弥陀の名号をとえ、ひとえに弥陀一仏を念ずる、これを専修となづく」（『唯信鈔』聖典九一九～二十頁）、と言われます。「専修念仏」という呼称は吉水の教団内で、師法然上人の本意を知らず、念仏と諸行を兼修する他の人々から批判的に言われた名であり、その内容から過酷な弾圧の要因になったとも言われます。諸行を兼修することについて宗祖は、「雑の言は、人天・菩薩等の解行雑せるがゆえに雑と曰えり。本より往生の因種にあらず、回心回向の善なり」（「化身土巻」聖典三四二頁）と批判されます。人間そのものを問わずに、人間の諸関心による往生理解や、人間の努力を頼みとして生まれる世界は、つまるところ仏智疑惑による辺地懈慢界であるからです。それは浄土の行、如

来より賜りたる信心とまったく異質です。集団や組織においては、人間関係が問題となります。しかし相論が、専修念仏の仲間内において起ってきたことが問題なのです。あなたは真に専修念仏の朋なのですかと、私たちの信の中味が問われているのです。

名利に人師を好む

思えば教団再興を願いとされ、『歎異抄』を「当流大事の聖教」といただかれた蓮如上人の『五帖御文』一帖目第一通には、先ず「弟子一人ももたず」と引文されています。そこには僧分の信が不明であり、また素朴に聴聞する門徒を叱責して仲を引き裂き、結果ともに一生を空過させて、自損損他の過ちを犯していることが嘆かれています。「今日の日本には、家庭も町も国中に先生はいるが、生徒は一人もいない。人々は互いに嘲笑し合って、相互に顔を洗うことを忘れてる」という戒めの言葉を聞きました。名利に人師を好む心は、念仏の法に遇いながらも尚、自らを是として固執するがゆえに、他を軽んじ高慢な態度となって顕れるのです。

弥陀の御もよおし

師がない人の信心は、必ず独りよがりになり頑さを免れません。また朋がない人の信心は信と言っても、それは具体性がなく独覚心であります。「弥陀の御もよおし」とは、仏によって門余の一道として、特に凡夫のために開かれた仏道であることを、自覚的に語られた言葉です。その凡夫とは、聖者に対していうのではなく、すべての人が自己を凡夫として見出すということであり、宗祖は、その教えに生きたよき人法然上人と出会い、その出遇い得た法によって公開された人間の関係を、僧伽として賜ったのでありましょう。念仏を喜ぶということは、弟子を作り誇るようなこととは違うのです。自力を翻して仏に帰せしめたのは弥陀の御もよおしであり、そのことを知らしめた師恩を、謝する意味をもって語られた言葉が、「弟子一人ももたず」であります。